

# 書評「数学はいつも苦手だった」

北海道大学 中村 郁

2004年11月東工大を訪問した折、訳者の石井志保子さんからこの本をいただいた。その晩早速拝見、その後感想やら翻訳の意味のとりにくい点など申し上げたご縁で、私に書評依頼がきたものらしい。一般に書評は単なる内容紹介や推薦ではなく、著者には多少厳しくとも、できるだけ類書との比較レポートを読みたいと、私はかねがね思っていたので、この書評もその考えに沿って書いてみたい。とりあえずタイトルの似たものを3つ並べてみる：

- [1] 「僕は数学しかできなかった」(小平邦彦)
- [2] 「誰が数学嫌いにしたのか」(上野健爾)
- [3] 「数学はいつも苦手だった」(ポイテルスパッシャー)

最初のふたつが、著者自身の言葉をタイトルにしているのに対し、[3]の原題「In Mathe, war Ich immer schlecht ....」は、前書きに、パーティーで著者と話す女性の悲しげなつぶやきとして登場する。著者の考えは別のところにあるから、その意味ではタイトルはよく似ている。

数学を語りかけるとき、誰に何を伝えたいのか、そのためにどの方法がもっとも有効なのか、この間にただ一つの答えがあるわけではない。小平はやはり数学者を志す人に数学を語りかけるとき、もっとも有能であった。[2]は現代日本の教育に強い危機感を持つ。[2]にあるのは、数学教育に関わるものとしての反省でありそれに基づく実践である。その多数のエッセイの中でも「ある高校生への手紙」は深い感動を誘う名文である。これは全国の中学生・高校生、もちろん大学生にも読ませたい。また、同じ数学者として素直に耳を傾けたい。

[3]は数学の嫌いかもしれない人々に向かって、ユーモアを交えて根気よく数学とはなにか、数学的なるものとは何か、あるいは数学者とはいかなる人種であるかを説明する。それは[2]と同じ危機感を動機としているだろうし、そのもくろみは成功していると言ってよいだろう。多くのジョークは数学者にはなじみのものでもあるし、おおむね明快である。そして著者は、数学そのものに入っていく。しかし、ここで紹介される数学やジョークは、数学が嫌いな人にはやはり重荷であるかもしれない。いくつかのジョークや数学的に佳境と思われる地点で、筆者もしばしば立ち止まらざるを得なかった。

数学者が好んでするように、この本もまたジョークと現実が交錯する。このような本の読み方を、数学者は一応知ってはいる。あるとき突然ジョークの世

界に入り、数学のアナロジーで純粋に論理的に進んであり得ない結論に到達して笑う、か笑わせ(ようとす)る。たとえば、

空の教室に一人学生が入っていった、二人学生が出てきた。

「もうひとり入ったら空集合になるね」(本書 174 ページ)

がその典型である。しかし、これはかなり苦しいジョークである。2003 年ワールドシリーズ、ヤンキースがマーリンズと対戦し 2 勝 3 敗で迎えた第 6 戦、直前の負け 2 試合に活躍して 1 戦ごとに打順をあげていた松井秀喜が飛ばしたジョーク、「(今日も負けてるし、自分も活躍している、そしていま 5 番だから)明日はいよいよ 4 番だな」これなら分かる。しかも数学的な本質は上のジョークと同じである。本書はよくがんばっていると思うし、相当成功していると思うが、やはり、数学の冗談にはまだ工夫がいるだろう。

ところで、おそらく著者も数学が好きで、自分自身の数学を学ぶ喜びの経験がこの本に結実したであろう、と思わせる本

[4] 「博士の愛した数式」(小川洋子)

これは、確かに日本数学会出版賞かつ本屋大賞第一位(2004 年)に相応しい「ワッカー」という素朴な喜びがこの「博士の愛した数式」から伝わってくる。やはり、素直な喜びに勝るものはない。読者が同じように数学を分かるかどうか気にしていない。読者はこの純朴さに圧倒されて、一緒にうれしくなるだろう。数学者にはどうしてもこういうものは書けない。しみりとしてそれでいて明るく、同じ本屋大賞第一位(2005 年)の「夜のピクニック」(恩田陸)に相通ずるものがある。軽いノリで書かれたふたつの本のどちらにも、おそらく現代のメルヘンという評があてはまらるうし、売れているのがよく分かる気がする。

さて脱線ついでにもうひとつ本を挙げると「冗談でしょうフィンマンさん」(フィンマン)等、一連のシリーズ、この本も楽しい。日本版で言うと「若き数学者のアメリカ」(藤原正彦)は、まあこれに近い。そこで [3] の「数学はいつも苦手だった」は、少々乱暴な品定めをすれば

$$\frac{1}{5}(\text{フィンマン}) + \frac{2}{5}(\text{博士の愛した数式}) + \frac{2}{5}(\text{著者の数学世界})$$

ということになりそうである。総じて好著と言ってよい。本書の装丁が「博士の愛した数式」に近いのは偶然ではなく、これは訳者 石井さんの強い御希望の結果である。

最後に、第 2 版以降見られなくなった迷訳で是非紹介したいものがある。「一意分解領域」、これは Unique Factorization Domain の訳語とおぼしき用語で、通常「一意分解整域」と訳される。最後の Domain は Integral Domain を指すから「領域」ではない。評者の「誤りでは?」という指摘に対する石井さんの反応が頗る面白い。メールの返事は「学生時代からセミナーでいつもそう言ってたけど、誰も教工テクレナカッタヨー」

このぼやきは本書に是非とも加えたい。